

リンク栃木ブレックスのケーススタディ

Case study of Link Tochigi Brex

1k08b236-8 氏名 吉田圭佑
指導教員 主査 木村和彦先生 副査 倉石平 先生

【研究目的】

本研究では、JBLに所属するリンク栃木ブレックスの経営のケーススタディを行う。リンク栃木ブレックスは2007年にJBL2に参加を表明して以降、1年目にJBL2で優勝、3年目には1部リーグであるJBLにおいてアイシンシーホースを破り日本一に輝いた。また、ホームタウンである栃木県宇都宮市において地元根付いた地域密着型のチームを作り上げ、市民に愛されるチームとなったことにより、ホームゲーム時にはホームスタジアムであるブレックスアリーナ宇都宮はいつも満員となっている。2009年度シーズンには完全黒字化を果たし、人気だけでなく経営面においても良いスタートを切ることとなった。

企業の所有するスポーツチームのように資金面における支援もなく、また東京や大阪といった人口の多い大都市でもない栃木県宇都宮市という地において、このような成果を収めることができた要因を明らかにし、地方都市におけるプロスポーツチームの可能性を考察していきたい。

スポーツチームが地方都市の抱える経済の衰弱といったような問題を解決し、地域を活性化させることができるのであれば、スポーツが果たせる役割は非常に大きいと考える。

実際にリンク栃木ブレックスがいかにしてこのような成果を収めるまでに至ったのかを明らかにする事により、今後スポーツ界、バスケットボール界を盛り上げ、地方都市においてスポーツチームを誘致することでわずかながらも地域に貢献できればと考えている。

【研究方法】

リンク栃木ブレックスの経営についてケーススタディする上で以下の事を行った。

- ① リンク栃木ブレックスの経営者である山谷拓志の講演聴講、半構造的インタビュー
- ② リンク栃木ブレックス運営会社である株式会社リンクスポーツエンターテインメントの社員の方2名への半構造的インタビュー
- ③ 雑誌、新聞などの記事の調査
- ④ 先行研究や書籍の文献調査

雑誌記事、そして講演会での内容を踏まえて、どのようにしてリンク栃木ブレックスが現在のうちに地元で愛されるチームを作り上げ、それだけでなくわずか3年でJBL優勝、3年目において収支完全黒字化を果たすことができたのかという要因を半構造的インタビューを通して検証した。

【結果】

インタビューなどを通してリンク栃木ブレックスの経営における優位な点を知ることができたが、一つの要因だけによって成功へと繋がったとは考えづらく、資金・アリーナ演出・集客・地域貢献活動・選手のマネジメントなど様々な要素が相関し合うことによってシナジーを生み出し、その結果として、リンク栃木ブレックスは現在のような成果を収めるに至ったと考えられる。

【考察】

リンク栃木ブレックスは経営・戦績などの面から考えても運営において一定の成果を収めているということができるだろう。しかし、今後栃木県宇都宮市という環境の中で今以上により収益を伸ばしていくためには、6000人規模の新たなアリーナの建設する事などが考えられる。しかし、それだけでは見込める収益には限界があり、2013年にスタートする予定である新トッププロリーグの開幕など、外部環境の変化が起こる事で収益拡大のチャンスが増えていくと考えられる。

今回、本研究ではリンク栃木ブレックスの事例を扱い、チーム経営、そして地方においてプロスポーツチームが果たせる役割を論じたが、スポーツには地方でこそ、その価値を発揮できるのではないかと感じた。スポーツというメディアを通す事で人と人、そして企業と企業を結びつけて、新たな繋がりを生み出すものであると考えられる。

「スポーツ不毛の地」と呼ばれていた栃木県においてリンク栃木ブレックスが必要不可欠な存在になったように、日本中のあらゆる都市で地域に密着したスポーツチームを作ることが出来れば、スポーツを通して地域、バスケットボール界、ひいては日本全体を盛り上げていく事が出来るのではないだろうか。